



大^{だい}すきだよ！ モモチちゃん

これは、ぼくの犬^{いぬ}たちのしやしん。右^{みぎ}がロンで、左^{ひだり}がモモ。
モモは、目^めが見^みえないんだ。

ぼくとモモは、二年^{にねんまえ}前に出^で会^あったんだ。

家族^{かぞく}で遊園地^{ゆうえんち}に行^いった帰^{かえ}りだった。車^{くるま}にクラクションを鳴^ならされて、道^{みち}にすわりこんでいる子犬^{こいぬ}がいた。目^めが見^みえないようだった。車^{くるま}を止^とめてだき上^あげると、子犬^{こいぬ}は、ぼくのむねで、ぶるぶるふるえていた。

「おとうさん。この犬^{いぬ}、かっていい。」

「目^めの見^みえない犬^{いぬ}をかうのは、たいへんだよ。世話^{せわ}ができるのかい。」



ぼくは、大きくうなずいた。おとうさんは、子犬とぼくを
じっと見た。そして、

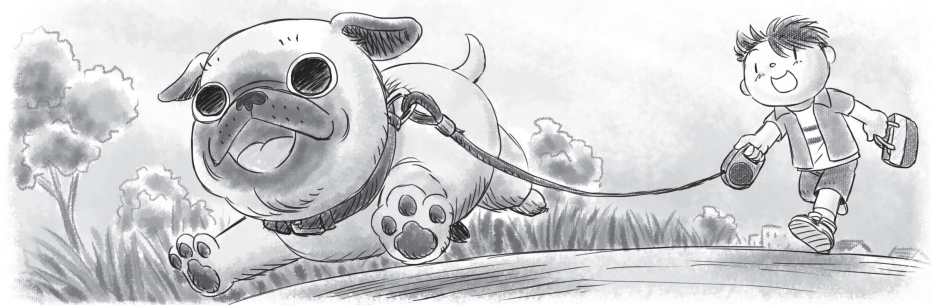
「せきにんをもって世話をするんだぞ。一つの大事ないのち
なんだから。」

と、言ってくれた。ぼくは、子犬をだきしめた。

子犬の名前は、モモになった。家に来たばかりのころは、
なれなくて、こわがっているみたいだった。へやのすみで、
じっとしていて、小さな音にもおどろいた。

「モモ、だいじょうぶだよ。ここにいろよ。」

ぼくは、できるだけモモのそばで、声をかけるようにした。
さんぽも、はじめはこわがった。とちゅうで田んぼにおっ
こちたり、いきおいよく走って、かべにぶつかったりした。
だから、手をたたいたり声をかけたりして、気をつけたんだ。



？
かんが
考えよう

- ① ぼくは何回も、（世話をやめよう。）と、思った。でも、モモを見ていると、ふしぎにまたがんばろうという気もちになった。
- ② 今では、さんぽの道をおぼえていて、ぼくを引っばっていかんだよ。
- （モモは、目が見えているのではないか。）
- と、思うくらいだ。ぼくが、「おいで。」と、言うと、走ってくるんだよ。
- ぼくは、モモが大すき。モモも、ぼくが大すき。
- モモちゃん、これからもぼくといっしょに大きくなろうね。

（文）木下美紀／絵 クリエイティブ・ノア

- ① モモの世話をするとき、「ぼく」はどんなことを考えていたのでしょうか。
- ② 生きものをそだてて、楽しかったことはありますか。